

巻頭言

なぜ、PBL (problem based learning : 問題基盤型学習) なのか？

日本作業療法研究会会長

聖隷クリスティーア大学リハビリテーション学部作業療法学専攻

宮前 珠子

「ペタゴジー: Pedagogy」と「アンドラゴジー: Andragogy」という言葉がある。ペタゴジーは辞書で見るとその訳は「教育学」だが、語源的にはギリシャ語で paid は「子ども」、agoge は「指導」だということ。つまり従来の教育学は、子どもを教えるための教育方法であった。

アンドラゴジーは、ペタゴジー的方法、つまり事実伝達型講義、割り当てられた読書、ドリル、テスト、機械的暗記、試験といったやり方を成人の教育に用いたところ、成人学習者がしばしば抵抗を示すことが実感されるようになり、その結果成人の学習あるいは教育方法には子どもとは異なる性格があるとして1960年代にヨーロッパで生まれた言葉であり、「成人教育学」と訳される。andr-は成人を意味するギリシャ語の aner からきている。

Knowles (1980)は、アンドラゴジーの概念を体系化し、成人の学習には次のような特長があるとした。①人間は成熟するに伴い依存的なものから自己主導・自己決定的なものへと移行する。②人間は成長に伴い多くの経験を持つが、これが学習のための貴重な資源となる。③成人の学習へのレディネスは社会的発達課題や社会的役割を遂行しようとするところから生ずることが多い。④成人の学習への方向付けは、より即時的で、問題解決中心あるいは課題達成中心の学習内容編成が好ましい。⑤成人の学習への動機付けは、内面的なもの(自尊心、自己実現など)がより重要となる。

当初 Knowles は、アンドラゴジーを「成人の学習を援助する技術と科学」、ペタゴジーを「子どもを教える技術と科学」としていたが、その後小中学校の多くの教師がアンドラゴジーの概念を青少年の教育に当てはめてみたところ、ある状況下で優れた学習を生み出したことから、アンドラゴジーは成人教育に限らずペタゴジーに並ぶ教育のもう一つのモデルであると考えられるようになった。一方、成人の学習においてもコンピュータープログラムの学習などペタゴジー的方法が向いているものもある。

私は、幼稚園から小・中・高校、大学、専門学校、大学院と23年間も学校へ通い続けたが、現在の私の基になっているのは、小学校3年までいた毎日がほとんどアンドラゴジー的「しごと」の時間で埋まっていた経験主義の学校、そこでの国語と算数の徹底したペタゴジー的教育、大学のアンドラゴジー的クラブ活動、OT専門学校でのペタゴジー的基礎科目である。中高の教育と、大学及びOT専門学校の専門教育はレポートと実習をのぞき、ペタゴジー的であったためあまり身に付かなかったように思う。大学院はアンドラゴジーそのもので勉強の仕方を学んだ。そして論文を書くにも仕事にも最も役立ってきたのは1971年と1983年に受講したアンドラゴジーを具現化するKJ法講習会である。

もし、OT養成校の基礎科目から専門科目までが、アンドラゴジー的に構成され、知識・技術の性格によってペタゴジー的教育がうまく組み込まれていれば、もっと充実した時間を過ごすことが出来たのではないかと思う。ここで今の私にとって、アンドラゴジー的方法とはPBLとOSCEであり、ペタゴジー的方法は、スキル・ラボ、暗記、テストなどになる。

参考書: Knowles, M.S.(堀薫夫監訳): 成人教育の現代的実践. ペタゴジーからアンドラゴジーへ. 鳳書房, 2002